

様

年

月

日






LFP（少量シスプラチンと持続5-FU併用）療法

この治療では2種の治療薬を使用します。

シスプラチン注：少量で5-FUの効果を強める作用があります。

5-FU：細胞のDNAやRNAの合成を妨げ効果を現す。持続で注入することで効果が強まります。

<投与スケジュール> . . . 5週間（4週投薬1週休薬） 1コース コース目

<薬品名> <投与方法・時間>	<薬の作用>	1・8・15・22	2・9・16・23	3・10・17・24	4・11・18・25	5・12・19・26	6・13・20・27	7・14・21・28	28~35
		/	/	/	/	/	/	/	/
グラセトロン注 <静注>	吐き気どめ								休薬
シスプラチン 生食100ml <点滴静注 30分>	化学療法剤・5FUの効果増強								
5-FU 希釈液（ポンプ充填の容量調整のため） <持続注入 7日間>	化学療法剤	7日間持続インフューザーポンプ 							

<薬剤投与日の注意>

- ★ 点滴部位が痛くなったり、腫れたりした場合や点滴が落ちなくなった場合は、薬液が血管外へ漏れていることがありますので、すぐに申し出てください。
- ★ 薬剤の投与は、血液検査やその他必要な検査を行いながら進めていきます。副作用の発現・合併症の有無によって治療の途中でも、薬剤の減量・変更や中止されることがあります。

(備考)



<副作用>

副作用と症状	発現時期・頻度	対策	メモ
白血球減少 発熱 風邪様症状	約4週ぐらいで低下	うがいや手洗い・休養を心がけて下さい。白血球を増やす薬や抗生物質を使うこともあります。	
血小板減少 出血	—	けがや打ち身、歯ぐきからの出血、鼻血などに気をつけて下さい。止血剤を使ったり、輸血をすることもあります。	
貧血 倦怠感 息切れ	—	採血結果によっては、造血剤を使ったり、輸血をすることがあります。	
吐き気・嘔吐	2～3週後	我慢せずに吐き気止めを使用してください。	
下痢・腹痛	2～3週後	水分摂取を心がけて下さい。下痢止めや整腸剤を使用してください。重度の場合は点滴をすることもあります。	
口内炎	2～3週後	うがい薬や塗り薬を使います。	
腎障害	長期継続後	水分摂取に心がけ、尿量を多くしてください。	
間質性肺炎、肺障害	非常にまれ	空咳、息切れ、呼吸困難、発熱など。早期発見が大事。	
過敏症（アレルギー） 顔がほてる 息苦しい、胸が苦しい 発疹、かゆみなど	—	予防薬を使いますが、症状があればすぐに申し出て下さい。	
白質脳症	非常にまれ	口のもつれ、ふらつき、物忘れなど。早期発見が大事です。	
その他：発熱、倦怠感、心障害、視力障害、脱毛、手足症候群など			

- ▶ 副作用の少ない治療法です。しかし効果を期待するには継続する必要があるため、長期になると、腎障害や、手足のしびれ、色素沈着、皮膚や爪、指が黒く変色するなどの症状が現れることがあります。
- ▶ 日焼けが強く現れることがあります。外出時には、帽子や長袖の服を着用するなど直射日光を避けるようこころがけてください。
- ▶ ここにあげた副作用は、代表的なものです。必ずしもこれらの症状が現れるとは限りません。副作用が現れても、早期に発見、対処すれば、治療の継続が可能です。過剰に心配せず、気になること、調子の悪いことがあれば、医師・薬剤師・看護師に申し出て下さい。